

基号 [サブシンボル] を定義する

——接続主義の文字学 [グラマトロジー] 的的定位——

高多 伊吹

1.序：記号 [symbol] から基号 [subsymbol] へ——スモレンスキーの接続主義

2+2=4。見てのとおり、いたって単純な計算である。加法の公理を用いて等式を証明することは容易であるし、AND/OR/NOTといった基本的な論理ゲートをいくつか組み合わせれば、これを含めた任意の自然数の足し算を実行する電子計算機を作ることでもある。

「2+2は？」と問われたあなたが「4」と答えるとき、起こっている事態はもうすこし複雑だろう。計算が脳で行われていると仮定して、その過程は、たがいにシナプスによって接続された無数のニューロン間を伝う発火の連鎖からなる。耳にはじまる入力の問題を差し置いても、そこで生じている演算の膨大な量は、もともとの式が表していたその比ではない¹。そしてこの際には、各ニューロンがそれまで保存していた状態量（記憶、精神状況、文脈……）の影響が不可避に混入する。あるいはあなたは「4」と答える代わりに、困惑しながら「なぜ突然そんなことを？」と相手に返すかもしれない。友人とドストエフスキーやオーウェルについての談義を嗜んでいる最中なら、賢しげな笑みを浮かべて「5」と答えることもあるだろう。もちろん、いずれも必ずしも不適切な回答ではない。

1988年、認知科学者ポール・スモレンスキーは、このふたつの演算様式——電卓的な計算と脳的な計算——を明確に区別することを試みた。人間の意味認知の機序をもっぱら離散的な記号操作によって片付けようとする古典的な潮流——記号主義 [symbolism] と呼ばれる——に嫌気が差していた彼は、このオルタナティブとして、新たに**接続主義 [connectionism]** という考え方を提唱する。「無意識は言語のように構造化されている」とはジャック・ラカンによる有名なテーゼだが、この言い回しを借り受けるのならば、スモレンスキーの主張は端的に「無意識は言語のように構造化されていない」と要約できる。人間の認知は記号的な言語モデルだけでは説明できず、それを模倣しようとする機械も記号主義的アプローチのみに依拠して設計されるべきではない、というわけだ。果たして彼は深層学習の思想的源泉となった論文のなかで、画定された**記号 [symbol]** の下層に、ニューラルユニットを演算素子とする**基号 [subsymbol, 下記号]** の水準を導入することになる。

本稿の目的は、工学的な意図のもと導入された「基号」を、フランス現代思想家ジャック・デリダおよびミシェル・セールの「文字」についての議論と接続し、哲学的な射程を持つ概念として再整理することにある。

前半部では、議論の仮想敵として同じくフランスの現代思想家カントン・メイヤスーが取り上げられる。われわれは記号主義/接続主義というふたつの言語観の分離を、メイヤスー/デリダそれぞれの「暗号 [code/crypte]」を主題とするテキストにおいて導入される解読法の差異のうちにアナロジカルに見出す。後に見るとおり、両者の語る暗号はほとんど同型の入れ子構造を持つ一方、記号という観念についてまったく対照的な態度をとっていた。一言で言えば、メイヤスーが暗号 [code] を記号の同一性の上で成り立つものと考えたのに対し、デリダはむしろ暗号 [crypte] を、こうした同一性を解体してしまうものとして捉えていたのだ。そこで登場するのが、離散的で分割不可能な記号に対する、連続的で分割可能な文字というアイデアである。われわれはこの発想の源泉を精神分析家ジークムント・フロイトの神経学モデルに遡って求めることで、ニューラル・ネットワークを基盤に置く基号をデリダの文字学においてすでに駆動している操作概念として位置付ける²。

後半部では、前段で把握されたデリダとメイヤスーのあいだの対立を、セールの図式の上に付置することを試みる。両者の議論で共通していたのは、暗号を暗号でないものとの混同によって成立するなりすまし

¹ あるいはこの「2+2=?」に対する出力を生成するニューラルな過程のミクロな部分に（たとえばふたつのシナプスを伝う信号の合流というかたちで）まさに2+2=4に相当する処理が含まれている、ということもありえる。全体と部分の関係をなすふたつの「2+2=4」（記号的過程と量的過程）、このふたつの区別がこれから問題になる。

² スモレンスキーの接続主義とデリダのエクリチュール論（フロイトを介した）親和性については小泉義之「脳のエクリチュール デリダとコネクショニズム」『現代思想』2005年2月号、33(2)、青土社、2005年がpp.209-220の箇所ですでに部分的に指摘している。本稿が新たに主張するのは、両者の思想がたんに類似ないし近接した背景を持つというばかりでなく、デリダの文字学がじっさい基号的パラダイムのもとではじめて整合的に解釈され、かつこの態度がメイヤスーのような（記号的パラダイムのうちにいる）他の論者から彼の主張を隔てる特徴となっているという点である。

の効果として捉える視点である。彼らの言う暗号とはこの擬態、メッセージの内容だけでなく、その存在をも隠蔽する文書秘匿術 [ステガノグラフィ] にほかならない。セールの文字学の狙いは、この混同から引き起こされるふたつの視点の対立、エントロピーを意味のある複雑なシグナルあるいは意味のない乱雑なノイズとして見なす同居しない見方を調停することにあった。われわれは同じく両者の視点の均衡から自然言語の性質を説明したジョージ・キングズリー・ジップの論文をかすがいとしてステガノグラフィックな形態が必然的に生じる情報理論的フレームを整備したのち、この枠組から自然に導かれる意味の確率性という観点が基号的パラダイムとのみ整合することを説明する。

*

スモレンスキーの論敵となったジェリー・フォードに代表される典型的な記号主義³は、人間の意味認知を、離散的な記号を（形式論理のような）一般化された規則に基づき操作する能力によって説明する。この考え方のもとでは、たとえば文“John loves Mary.”の理解とは、文を構成するおのおの区別された意味論的（概念的）な表象単位（“John”, “loves”, “Mary”）と、これら三項の統語論的な結合（S=“John”, V=“loves”, O=“Mary”）を把握することにほかならない。意識的な認知は当然のこと、直観的な認知もこのフレームのもとで記述されるとするのが彼らの主張であった。

しかしスモレンスキーの視点からすると、この筋はまったく問題含みなものとなる⁴。人間の言語運用が厳密な規則に基づいているという想定はあまりに柔軟性に欠け、学習による可塑性や文脈依存性への説得的な説明をまるで提供しないからだ。仮にわれわれが「 $P \rightarrow Q$ ならば Q 」という推論形式にしたがっていると、この「 $P \rightarrow Q$ 」という知識そのものはどのように獲得されるのか？ 記号主義は畢竟、いかにして特定の記号が特定の意味を担うのかという発生の問いをブラックボックスに追いやる点で不十分なものに留まってしまう。

そこでこうした概念操作の下部構造として提案されるのが、基号を単位とする接続主義のモデルである。

コネクショニスト・モデル（図1⁵）では、ある知覚情報（数式、文、音声信号、画像……）はベクトル量に変換され、入力層に送られる。層をなすニューラル・ユニット（基号）はベクトルの各基底に対応する状態量を持ち、非線形の重み付けを行う活性化関数を乗算されたのち次の層のユニットへと送られる（活性化関数は各ニューロン間のシナプス結合の強度を表し、正の強度は「興奮性」を、負の強度は「抑制性」を示す）。隠れた中間層群を介した（多数回の）フィルタリングを経て、最終的に入力に対する解釈としての出力ベクトルが得られる。結果は必要に応じてわれわれの言語へと翻訳され、かくして猫の画像は、「これは猫だ」という文字列へと変換される。

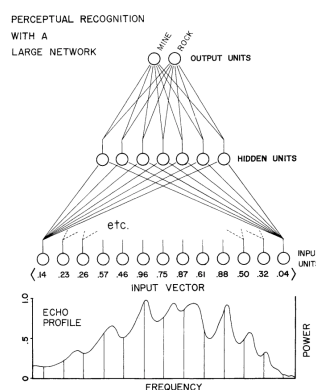


図1：単純化された接続主義モデルによる音声処理の例。反響音の周波数成分を入力として、目の前の障害物が岩か機雷かを予測する。

³ たとえばFodor, J. A., *The Language of Thought*, Harvard University Press, Cambridge, 1975, またFodor, J. A., “Why there still has to be a language of thought” in *Psychosemantics: The Problem of Meaning in the Philosophy of Mind*, MIT Press/Bradford Books, Cambridge, 1987などを参照のこと。

⁴ Smolensky, P., “On the proper treatment of connectionism” in *Behavioral and Brain Sciences*, 11(1), Cambridge University Press, Cambridge, 1988, pp.5, 14-19. また小泉義之「脳のエクリチュール デリダとコネクショニズム」『現代思想』2005年2月号, 33(2), 青土社, 2005年, pp.216-217.

⁵ Churchland, P. M., “On the Nature of Theories: A Neurocomputational Perspective” in Savage, W. (Ed.), *Scientific Theories: Minnesota Studies in the Philosophy of Science*, Vol. XIV, Minneapolis: University of Minnesota Press, 1989, p.71より。

接続主義においては、言語的表象はあくまで入力および出力末端にしか登場しない。記号主義は、この入出力の因果関係を、概念的[conceptual]な枠組のなかで近似的・仮想的に記述する立場として置き直される。

スモレンスキーは、接続主義を記号主義から隔てる際たる特徴として、ジェフリー・ヒントンの**分散表象 [distributed representation]** という考え方を参照している⁶。記号主義のもとでは、ある意味を担う表象は特定の記号として局所化されている。たとえば先の例文における〈John〉という意味は文中の原子的表象"John"がもっぱら担っているとされ、操作過程においてこの概念単位（タイプ）の単一性が揺らぐことはない。他方接続主義においては、〈John〉の意味に一意に対応する特定のニューラルユニットなるものは存在しない。それぞれの基号が保存するのはたんなる一次元量であり、ほとんど意味以下のものではない。タイプとトークンの対応関係は、むしろネットワーク上の活性化関数の全体のなかに遍在するとみなされる（図27）。意味はもろもろのニューロン間の接続強度の差異のなかに分散しているわけだ。この視点の優位性は、学習による知識の獲得やそのつど変化する文脈に応じたわれわれの出力の変化を、それぞれの活性化関数の更新の結果として説明できる点にある。このようなダイナミズムは、記号主義の内部にとどまっている限り記述できない。分散表象としての基号は、意味と一対一対応する画定された記号という観念を下方へと解体するのだ。

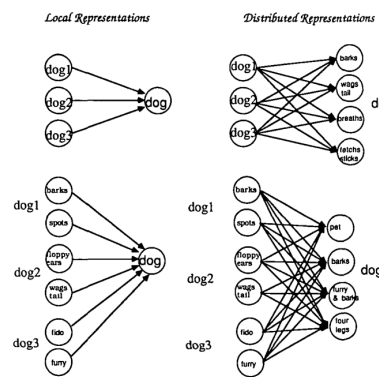


図2：記号主義における局所的表象 [local representation]（図左）と接続主義における分散表象 [distributed representation]（図右）の対照図

かくして接続主義のもとでは、記号の同一性に量的な演算が先立っている。

ところが、これとは逆の順序から記号を思考した哲学者がいる。彼は反対に、量的な演算が成立するためには、まず記号の同一性が担保されなければならないと考えた。小泉義之が留保したように、コネクショニズムは一切の同一性を捨て去っているわけではない。量的演算は、その状態量を保存し加算や減算を可能にする恒常的なユニット＝入れ物を要求する⁸。メイヤスは、計算（加算）というプロセスにおいて必然的に要求されるこの持続性の根拠として、ふたたび記号の同一性を見出した。

2. 再演 [répétition] から重複 [réitération] へ——メイヤスの記号/暗号論

議論の前提を手短に抑えよう。メイヤスの哲学は、おおきくつぎのふたつの主張によって要約される。

1. 充足理由律の否定：世界は確率概念を超越するほどのまったくの偶然性に満ちており、いまたまたまこのように成立していることにはなんの理由もない。世界は突然別様に変化する。この偶然性のみが世界の必然である。

⁶ Hinton, G. E., McClelland, J. L., Rumelhart, D. E., "Distributed representations" in Rumelhart, D. E., McClelland, J. L., the PDP Research Group (Eds.), Parallel distributed processing: Explorations in the microstructure of cognition, Vol. 1, MIT Press, Cambridge, 1986, pp.77-109.

⁷ Hanson, S. J., "On the obvious treatment of connectionism" in Behavioral and Brain Sciences, 11(1), Cambridge University Press, Cambridge, 1988, p.38より。

⁸ 小泉(2005), op. cit., p.222.

2. 数学的規則の実在性：このような偶然性は、世界が数理的構造を持つという仮定のもとで基礎付けられる⁹。したがって世界の前提としての数学的規則は、われわれの主観的認識とは独立した仕方である。

詳細な議論は彼の名著『有限性の後で』を当たってもらおうとして、ここでは彼の哲学を通底する言語観を問いに付すことにしよう。上述のとおり、メイヤスは人間のような認識の主体との相関を排した上で成立する世界の存在論を掲げる論者であって、スモレンスキーのように認知モデルに直接関心を向けるわけではない¹⁰。だが両者には興味深い共通項が存在する。概念と結びついた意味論的表象としての記号を棄却しつつ、その下流にある事象を数理的構造としてモデル化しようとする点だ。ただしメイヤスはスモレンスキーとは反対に、量的演算の背後に意味概念を欠いたまま同一性を保つケノタイプ [keno-type, kenosは空虚の意] の存在を見出すことで、記号をべつの仕方でも蘇らせる理路を取る。

なぜ量的な演算の背後に同一的な記号が措定されなければならないか。メイヤスはあるテキストでこの機序を、**再演 [répétition] / 反復 [itération] / 重複 [réitération]** という記号の三つの異なる繰り返しの形式をまたぐ段階的な発展から記述している¹¹。順を追っていこう。

まずはじめに再演がある。再演は、たとえば楽曲中に繰り返し現れる「ド」の音に現れる。それぞれの「ド」は互いによく類似しているものの、その響きの微妙なずれや、与えられた位置による役割の違いに応じて経験的な差異を持つ。それゆえ再演はそのつどの感覚的な類似（あの音とこの音はよく似ている……）に依拠した、あくまで有限回の繰り返しの把握される。

「ド」の無際限の生起を思考することが可能になるのは、この再演の効果、すなわちそれぞれのモチーフの生起における感覚的差異が抹消され、同一のタイプ「ド」に属するトークン（個別事例）として措定されたときである。ここで再演は反復となる。われわれが異なる筆跡で書かれたアルファベットのAを同一の「A」として認識できるのは、この再演の反復化がなされた後でのこととなる。

またさらにわれわれは、ここで同一のタイプの下に反復される個々のトークンを再度区別し、それぞれに異なるナンバーを割り当てて数え上げることもできるだろう（ひとつめのA、ふたつめのA……）。ここで反復化の過程で一度抹消された同じ記号同士の示差性が、ナンバリングという仕方でも復活する。この無際限かつ示差的なカウントの原理が、第三の形式たる重複と呼ばれる（図3¹²）。

Reiteration	I	II	III	III, etc
Iteration		+I	+I	+I

図3：トークンの反復からその量的重複（数え上げ）への移行。再演の反復化によって抹消された示差性が、今度は非経験的な形（ナンバーの割り当て）で再導入される。

メイヤスによれば、この重複による加算操作（ $1, 1+1=2, 2+1=3, \dots$ ）こそ、算術を基礎付けるものにほかならない。したがってトークンケノタイプ関係からなる記号の同一性は、あらゆる量的な演算に先立つ条件となる。彼言うところの世界の数理的構造も、この地点からはじまって構成される。かくしてその目線にあって、世界（あるいは世界にアクセスするわれわれの認識）は形式言語のように構造化されている。

メイヤスにとって重要なのは、記号の同一性の導入（反復化）において、意味の次元を導入する必要がないということだ。この点がフォーダーとは異なっている。問題になるのは識別性のみであってそれ以外

⁹ のこの議論に関わるため、この部分の議論を簡単に紹介する。「世界は偶然である」というメイヤスの主張に対し、次のような反論が浮かび上がるだろう。世界が偶然であり、そのありようが必然的でないとするならば、世界の法則はじっさいに理由なく頻繁に変わり、安定的に存在できないはずである。ところが、現に世界は安定して存在する。したがって世界は必然的である。彼はこの推論を「頻度の帰結」と呼んで攻撃の対象とする。曰く、頻度の帰結が成り立つのは、宇宙の可能性の全体集合をサイコロのように想定したうえで、その偶然性を確率的なものとして捉える場合に限られる。必然論者の主張は「もしもサイコロの出目（世界のありよう）が偶然ならば、現に同じ目が出続けている（世界が安定している）という事態を説明できない」というものだが、メイヤスによれば、そもそも可能の全体がサイコロの目のように全体化可能であるという前提が誤りである。彼はプラリ=フォルティの定理として知られる「超限順序数の全体集合は存在しない」というテーゼを引用した上で、世界のパターンがもし超限集合論と対応する数理的構造を持つと仮定するならば、必然論者が反駁の根拠とする事象の集合の全体性および確率の概念がそもそも措定されえないとする。このような世界の非全体性の想定のもとでは、世界の偶然性とその見かけの安定は両立する、というのが彼の論法である。詳しくはAprès la finitude. Essai sur la nécessité de la contingence, Éditions du Seuil, Paris, 2006. (Q.メイヤス『有限性の後で 偶然性の必然性についての試論』千葉雅也ほか訳、人文書院、2016年)の第四章（邦訳pp.137-186）を参照のこと。

¹⁰ メイヤスにとって、認識とは実在への直接的なアクセスにほかならない。つまり彼の体系においては、存在論と認識論の差異が抹消されている。

¹¹ Meillassoux, Q., "Iteration, Reiteration, Repetition: A Speculative Analysis of the Sign Devoid of Meaning", trans. Mackay, R., Gansen, M., in Avanesian, A., Malik, S., (eds.), Genealogies of Speculation, Bloomsbury, London, 2016 [IRR], pp.172-179. (Q.メイヤス「反復・重複・再演」立花史訳『現代思想』2019年1月号, 47(1), 青土社, 2019年), 邦訳pp.50-55.

¹² [IRR], p.177より。

ではない。メイヤスーがケノタイプの導入にあたって、偽の暗号という事例を持ち出すところが興味深い。彼はヴォイニッチ手稿がそれらしいだけの見せかけの暗号である可能性に言及しつつ、相手をあざむくために設計された擬似暗号がそれでも解読の対象になりうることを指摘している¹³。暗号がほんとうに暗号かどうか判明する前から解読が可能であるためには、意味以前に、暗号を構成するそれぞれの記号の同定が行われなくてはならない。そのあとではじめて、たとえば解読のための頻度分析の局面において、文字の個数の数え上げ＝重複の操作が可能になるだろう。彼にとって、ケノタイプは暗号が生じるための先立つ条件なのだ。

さて、この数え上げの単位としての記号ないし語という発想がとりわけ前景化するの、彼がこの暗号 [code] 論を全面に展開した『数とセイレーン』(2011)における詩の解読の場面である。あとで見るデリダとの比較のために、簡単にその概要を紹介する¹⁴。このテキストにおいてメイヤスーは、ステファヌ・マラルメの著名な視覚詩『賽の一振り』(図4¹⁵、図5¹⁶)の解読を試みている。メイヤスーによると、この謎めいた、明らかに定型詩からは大きく逸脱した詩は、しかしある特殊な仕方で行われた韻律法への擁護なのだという。しかしそれはもちろん十二の音節を数え上げる定型詩の伝統に基づくものではない。マラルメは別の数、別の数え上げの原理に基づいていた。この仮説のもと、彼は詩をふたつの相反する水準において読解する——「これは暗号である」/「これは暗号ではない」。

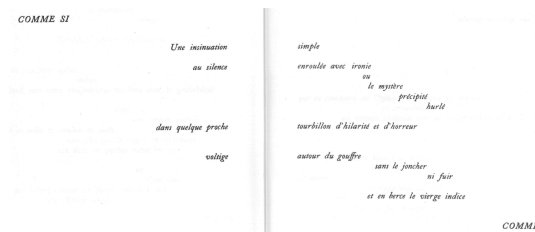


図4：Mallarmé, S., “Un coup de dés jamais n’abolira le hasard” (1897)のVI頁目。メイヤスーによれば、COMME SI—tourbillion—COMME SIの対角線配置が7-0-7という数の予告となっている。

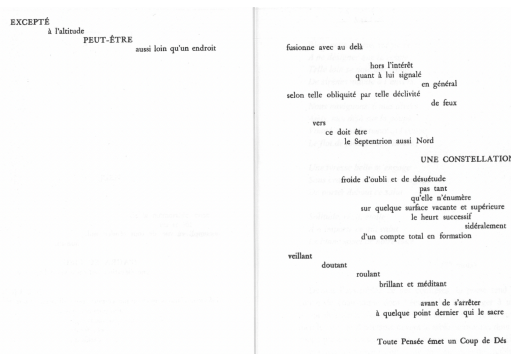


図5：同じくXI頁目。詩において重要なモチーフである七星 [Septentrion] が二度にわたって視覚的に表象される。問題の語PEUT-ÊTREが現れるのは左上の箇所。

レベル1の解読¹⁷：じつはこのマラルメによる詩は「ある特異な数」を鍵とする暗号である。その数は詩中の「形作られてくる全体が数え上げられ [compte total en formation] 」という指示に従い、(最後の独

¹³ [IRR], pp.168, 196.

¹⁴ 以下の議論については高多伊吹「(Un)countable: カンタン・メイヤスーにおける無底＝基底性」公益信託松尾金蔵記念奨学基金編『明日へ跳ぶ 人文社会学の新視点 7』, 風間書房, pp.74-78も参照のこと。

¹⁵ Meillassoux, Q., Le Nombre et la Sirène, Un déchiffrement du Coup de dés de Mallarmé, Fayard, Paris, 2011 [NS], pp.222-223より。

¹⁶ [NS], pp.232-233より。

¹⁷ [NS], pp.21-96. またQ.メイヤスー「『賽の一振り』あるいは仮定の唯物論的精神格化」[CDM]熊谷謙介訳『亡霊のジレンマ 思弁的唯物論の展開』岡嶋隆佑ほか訳, 人文書院, 2016年, 邦訳pp.177-191.

立した詩行を除く) 詩に含まれるすべての単語¹⁸の総数を数え上げることで表れる——707¹⁹。詩のVI頁目で左上から右下へ対角線上に配置された語「Comme si=七、tourbillon=〇、Comme si=七」²⁰の並びによってあらかじめ暗示=秘匿されたこの数字は、〇という空白を挟んだ七の回帰=反復される韻を体現している²¹。この十二音綴詩句 [alexandrin] に代わる韻律こそ、マラルメの仕掛けた暗号が隠していたものである。

レベル2の解説²²：しかし他方で、この707という数に基づく暗号化(エンコード)と解説(デコード)という詩の過程そのものが危機に脅かされている。じつは**単語数の総和が絶対に707とは言い切れない**からだ。XI頁目に表れる、この詩におけるハイフン付きの唯一の語であり、それ自体不確定性を意味するPEUT-ÊTRE [おそらく] という語が1語か2語か決定できないという事実によって、707は708へ容易に転落する。この決定不可能性が、わたしたちをレベル1の解釈(マラルメは暗号化を施している=「これは暗号である」)とその破綻(マラルメは暗号化を施していない=「これは暗号ではない」)のあいだで宙吊りにし、そしてまさにそのことが、詩自身によるその主題=「偶然」(賽の一振りとは断じて偶然を廃さないだろう [UN COUP DE DÉ S JAMAIS N'ABOLIRA LE HASARD]) のパフォーマンスな実演となる。

解釈に対し、真っ先に想定されるであろう反論は次のようなものだ。ハイフンによる語数の決定不可能性がマラルメによる意図=目的論に回収されるのなら、つまり暗号/非一暗号のゆらぎ自体マラルメによって仕込まれた暗号であるのなら、この不確定性そのものの確定性によって「偶然」が損なわれるのではないか²³。メイヤスーは慎重にもこの懐疑に先んじている：707と708のあいだのずれがマラルメの意図によるものかどうかもまたわれわれには確定できない²⁴。それは偶然かもしれない——この懐疑は入れ子状にいくらかでも反復可能である。「あるレベル α の解説における不確定性がマラルメの意図した暗号であるか」という命題についてのレベル $\alpha+1$ の不確定性が発生し、したがってレベル3、レベル4と**高階化するすべての水準の解説において暗号/非一暗号の可能性がそれぞれ両立する**。707と708をめぐる必然と偶然を束ねる必然、と偶然、この絶えざる宙吊りによる不確定性こそが、一度は解かれたはずの暗号の暗号性を維持し続ける。

一見すると、メイヤスーの議論は語の数の不確かさを問題にする点で、記号の同一性という想定を揺らがせているようにも見える。だがそうではない。彼が詩の不確定性を、ある特権的なひとつないしふたつの単語(PEUT-ÊTRE)というきわめてミニマムな仕方で導入しているのは、それがメイヤスーの詩にじっさいに現れる特異な対象であることと同じ程度に重要な理由がある。メイヤスーの議論の全体は、はじめに707という数の数え上げが行われなければそもそも成立しない。だからメイヤスーの解説においては、たとえいくらかは数え損ねてしまっても、それでも**数え上げるという行為の可能性は相変わらず担保する単語という言語的単位は維持されなくてはならなかった**。 $1+1+1+\dots=707$ (あるいは、708)。はじめに記号(単語)ありき。

ところで、メイヤスーが用いた反復可能性 [itérabilité] という説明概念は、あきらかにジャック・デリダによる用語法を意識した(というより、混ぜ返した)ものである。じっさい意味を欠いたまま持続するケノタイプの性質は、デリダが論じる反復可能性 [itérabilité]、文脈を跨いで持続する標記の同じもの性

¹⁸ 数え上げの単位として音節ではなく単語を採用する理由をメイヤスーは以下のように説明する。まず詩において七が特権的な数であることは詩中で唯一具体的な数を含む七星 [Septentrion] という語の存在とXI頁でのその視覚的再現によって明らかである。ところで詩の末尾にある全体から独立した詩行「Toute pensée émet un coup de dés」は全体のいわば要約となっており、この最終行は鍵を得るための示唆を与えているはずだ。さて、この詩句に対して数え上げの結果が七になるような単位を探してみると、それは単語である。最後の文が意味するのは、こうして得られた数え上げの規則を最終行を除いた全体に対して適用せよ、というものである。[NS], pp.47-54. また[CDM], 邦訳pp.177, 180-182. 規則の妥当性は、「賽の一振り」と同時期(1893-1894年)に書かれたふたつの関連するソネの語数がそれぞれ70語、77語であることによってさらに補強される。[NS], pp.80-84.

¹⁹ 実際の数え上げの結果である対応表が巻末に収録されている。Ibid, pp.241-249を参照せよ。

²⁰ メイヤスーによれば、COMME SI [あたかも] のSIの含意はマラルメが晩年に手掛けた未完の詩「エロディヤードの結婚」との比較によって明かされる。SI [もし] に始まりSIに終わる、「賽の一振り」のVI頁目と同様の対角線的配置を持つこの詩において、SIはまずその描写のなかで斬首される聖ヨハネ [Saint Jean] の頭 [SJ=SI] を表している。そして彼が斬首の瞬間歌い上げること、「ドレミファソラシ」の呼び名そのものが聖ヨハネ讃歌に由来することを鑑みれば、このSIは八長調における第七音であるシ [SI] の音を仄めかしている。またtourbillon [渦] は「賽の一振り」において船と船長=韻律 [Maitre=Mètre] がそこに飲み込まれる虚無の象徴であり、したがって〇を表す。じっさいにVI頁目で中央の語はその形状において渦のように配置されている。かくして七、〇、七の並びが導かれる。[NS], p.55-68. [CDM], 邦訳pp.184, 188-191.

²¹ [NS], pp.73-75. [CDM], 邦訳p.203.

²² [NS], pp.99-204. [CDM], 邦訳pp.201-207.

²³ [NS], p.140.

²⁴ [NS], pp.140-142, 177-179.

[mêmeté] と呼んだものに見かけ上非常に近い。だが両者には決定的な差異が存在する。では、何が両者を隔てるのか。

3. 言語 [sprache] から象形文字 [bilderschrift] へ——フロイト・デリダの文字学

よく知られるとおり、デリダはそのエクリチュール [écriture, 書きことば] 論において、言語体系やコンテキストに依拠する記号の同一性 [identité] を絶えず揺らがせようとしていた。しかし彼は同時に同一性とは区別される表記の同定作用として**同性[mêmeté]**なる働きを論じてもいる²⁵。

文字もしくは線、数、固有名 […] が共通にもつもの、それは際立つ無意味 [insignifiante marquante, 標記を刻む非シニフィアン性] である […] この無意味さは標記されたもの [marquée] であるが、とりわけ再標記可能なもの [remarquable, 注目すべきもの] でもある […] 一つの標記は、それが標記であるためには […] 同定されうるのでなければならず、同じもの [le même] として認知されなければならず、一つのコンテキストから別のコンテキストへ移ってもまさしく再標記可能でなければならない²⁶

一見すると、これはケノタイプの記述としてそのまま整合するようにも思われる。ではいったいなにが違うのか。理解の鍵は、彼が多数のテキストで繰り返し論じた対象、フロイトの精神分析理論にある。

*

夢の表現手段は主として視覚的な像であって言葉ではないということを考えると、我々には、夢と言語 [sprache] を比較するよりも、夢と文字体系を比較した方がより適切なように思えてくる。実際、夢の解釈は […] **象形文字 [bilderschrift]** の判読ときわめてよく似ている²⁷

ラカンの師匠に当たるフロイトは、しかし無意識の過程を言語ではなくむしろ文字として捉えていた。言語ではなく文字、とはどういうことか。じつは彼の思想的来歴を辿ると、この「文字」という表現に、すでに接続主義的な視点が組み込まれていたことが分かる²⁸。

元来神経学者であったフロイトは「心理学草案」(1895)で早くも知覚—記憶の心的過程をニューロン・ネットワークにおける心的エネルギー $Q\eta$ のやりとりとして記述する経済論的発想に辿り着いていた²⁹ (図6³⁰)。このモデルの画期的な点は、知覚—記憶の原理をひとつのモデルで描くために、(活性化関数に相当する)ニューロン間の「接触障壁」=抵抗というファクターを導入したところにある。図式において、知覚の機能は透過性の(抵抗を持たない) ϕ ニューロン、記憶の機能を非透過性の(抵抗を持つ) ψ ニューロンが担う。そしてフロイトは記憶の原理を、 ψ ニューロンの ϕ ニューロン化、つまりその抵抗の局所的な減耗に求めた。ある ψ ニューロンを $Q\eta$ が通過するとき、当該ニューロンの抵抗が減算される。すると複数の

²⁵ このふたつの似て非なる概念の区別については東浩紀『存在論的、郵便的 ジャック・デリダについて』, 新潮社, 1998年, pp34-38などが詳しい。

²⁶ Derrida, J., "Mes chance: Au rendez-vous de quelques stéréophonies épicuriennes" in *Psyché Inventions de l'autre*, Gallilée, Paris, 1987(1982)[MC]. (J.デリダ「私のチャンス」『ブシュケー 他なるものの発明 I』藤本一勇訳, 岩波書店, 2008年), 邦訳pp.530-532.

²⁷ Freud, S., "Das Interesse an der Psychoanalyse" in *Gesammelte Werke*, Bd.8, Imago Publishing, London, 1943(1913). (S.フロイト「精神分析への関心」福田寛訳『フロイト全集』第13巻, 道籙泰三ほか訳, 岩波書店, 2010年), 邦訳p.217. また以下はデリダによる要約。「フロイトが考えているのは、絵文字的、表意文字的、表音文字的要素を——ヒエログリフのように、含んでいて、言葉[parole]には還元されないようなエクリチュールのモデルである」「フロイトが夢における論理的—時間的な諸関係の異質性を示唆するために依拠するものが、いつでもエクリチュールであり、絵文字や、判じ絵や、ヒエログリフや、非表音的エクリチュール一般の空間的シノプシスであったとしても驚くにはあたらぬ […] 夢の簡潔さや、その碑銘のような簡潔さは、石化した記号の感受なき現前ではないのである」(Derrida, J., "Freud et la scène de l'écriture" in *L'écriture et la différence*, Éditions du Seuil, Paris, 1997(1966)[FSE]. (J.デリダ「フロイトとエクリチュールの舞台」『エクリチュールと差異』改訂版, 谷口博史訳, 法政大学出版局, 2022年), それぞれ邦訳p.447, p.462.

²⁸ フロイトの神経学モデルと文字のモチーフの関連については石田英敬・東浩紀『新記号論 脳とメディアが出会うとき』, ゲンロン, 2019年, pp.110-151も参照のこと。本稿の全体は、この議論を踏まえたと一つの展開として書かれている。

²⁹ Freud, S., "Entwurf einer Psychologie" in *Gesammelte Werke Nachtragsband*, S. Fischer Verlag, Frankfurt am Main, 1987(1895)[EP]. (S.フロイト「心理学草案」総田純次訳『フロイト全集』第3巻, 新宮一成ほか訳, 岩波書店, 2010年), 邦訳pp.5-56. つづく説明のように、人間の精神活動を心的な「エネルギー」のやりとりと収支のモデルで説明する見方をフロイトのことばで経済論 [ökonomie] と呼ぶ。

³⁰ [EP], 邦訳p.36より。

回路間に重み付けの偏りが生じ、次の過程では学習された**選好**として機能するようになる³¹。弾力性を担う ϕ ニューロンに対する ψ ニューロンの可塑性が、記憶を司るのだ。以下はデリダによる要約。

もしも通道に対する抵抗がどれも等しかったら、あるいは通道のための力がどれも均衡しているのであれば、道順を選択する際の、一切の選り好みは失われてしまうことになる。そうなると記憶は麻痺してしまう。通道間の差異、これこそ記憶の真の起源であり、心の真の起源である。かかる差異のみが「進路の選り好み」(Wegvevorzugung)を解き放つのだ³²

さらに当時の資料からはフロイトが、やり取りされる心的エネルギーを文字との転写のイメージで把握していたことが伺える(図7³³)。じっさい後年のフロイトによって、知覚—記憶のニューロンモデルはさらに「マジック・メモ」と呼ばれる書記機械のモデルへと書き換えられることになる。

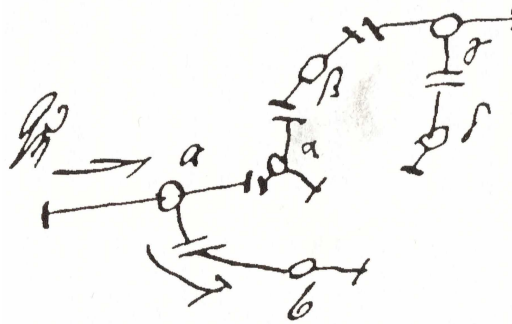


図6：フロイト「心理学草案」(1895)によるニューロン・ネットワークモデルのスケッチ。心的エネルギー $Q\eta$ が各ニューロン(a, b, α , ……)に流れ込む様子を表している。二重線は接触障壁を表す。

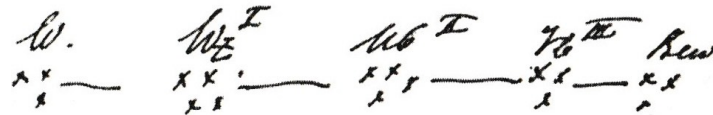


図7：フロイトからW.フリース宛の書簡に書かれた心的装置における文字の転写イメージ(1896年)。W(知覚)からUb(無意識)を経てBew(意識)へと文字痕跡が転写される。

マジック・メモはセルロイド・シート、パラフィン紙、ワックス・ボードの三層からなり、パラフィン紙とボードの接着と剥離——接触している箇所だけが黒く変色する——によって書き込みとその消去を実現する機構になっている。セルロイド・シートの機能はニューロンモデルにおける「接触障壁」の代替である(図8³⁴)。

とりわけ文字の書き込みという比喩のもとで、この接触障壁は本質的に重要な意味を持っている³⁵。この離間 [espacement] の効果こそ、文字の書き込みの条件であるからだ。どうということか。現代版のマジックメモ、iPadの操作を考えるとよい。タッチパネルがまともに機能するためには、刺激保護が適切な閾に設定される必要がある。入力 is 全面的であり、「書き込み」には意図していないノイズが必然的に混入する。刺激保護が強すぎるとタッチにまったく反応しなくなってしまう。かと言って弱めすぎると軽く袖が触

³¹ 「記憶の最も一般的な諸性格を満たすには […] 接触障壁の理論を導入すると、 ψ ニューロンの接触障壁が持続的に変化した状態に陥ることになる […] この変化の本質は、接触障壁が伝導性を増し、非透過性を減じるようになること、すなわちの ϕ 系の接触障壁により類似するようになることに違いない。接触障壁のこの状態を通道の程度と呼び表したい。すると、記憶は ψ ニューロン間に存在する通道によって […] ψ ニューロン間の通道における差異によって体现される […] 心的に [何かを] 獲得することはすべて ψ 系の分節化であり、それは、 ϕ と ψ を区別している接触障壁での抵抗が部分的に、そして局所的に規定された仕方によって放棄されることによってである」 Freud(1895), op. cit., 邦訳pp.10-12.

³² [FSE], 邦訳p.432.

³³ Freud, S., Briefe an Wilhelm Fließ 1887-1904., Frankfurt a.M., S. Fischer, 1986, p.218より。邦訳 (S.フロイト『フロイト フリースへの手紙：1887-1904』河田晃記、誠信書房、2001年) ではp.212に対応する。

³⁴ 石田英敬・東浩紀(2019), op.cit., pp.103.

³⁵ 書き込みの条件としての接触障壁の機能については高多伊吹「Minimum, Membrane, Maximum: ジャック・デリダにおける白と黒のあいだ」東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻『言語情報科学』, 23号, 2025年, pp.97-99の箇所も参照のこと。

れただけで画面がスクロールされかねない。あなたの「書き込み」とノイズの「書き込み」を隔てる適切な強度のフィルター＝関がなければ「書き込み」は可能ではない。あるいは写真の比喩。あまりに低い感光度ではブラック・アウトし、逆に振り切れればホワイト・アウトする。暗すぎる部屋でも明るすぎる部屋でも写真は取れない。

かくして書き込みは全面的な接触と完全な切断のちょうどあいだでのみ可能になる。「基底材 [subjectile] は、たとえば紙や布は、そのとき一枚の膜となる […] 基底材は抵抗する。抵抗せねばならぬ。抵抗が度を越すこともあれば、また十分でないこともある […] われわれは […] さらに下へと通過しなくてはならない。基底材 […] があまりに抵抗しすぎるということがあってはならぬ」³⁶。情報の完全な伝達など存在しない、というより情報の完全な伝達はもはや伝達ではないのだ。「記憶とは痕跡の侵入に対する抵抗であると同時に、まさにこの抵抗ゆえに、痕跡の侵入への開けなのである」³⁷。したがって、両極端の間を表す量の概念が必要となる。エクリチュールの量化——「書き込み」はコトバからモノへと変換される³⁸。無意識のフィルターはテキスト [text] をテクスチャ [texture] に変えてしまう。ここで書き込みは筆圧として量的に処理され、接触障壁によってフィルタリングされる。この物表象が意識にもう一度浮かび上がると、ふたたび（ときには元のものとは異なる）語表象として解釈されることになる。この再変換プロセスがエクリチュールを変質させる。つまりconnectionismは、disconnectionismでもある。

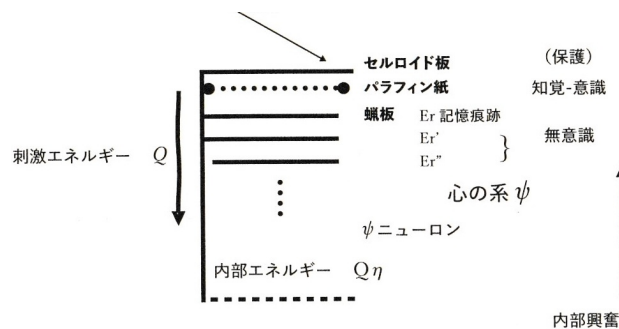


図8：石田英敬によるフロイト「マジック・メモについてのノート」(1925)の三層モデルの翻案。『夢解釈』(1900)での第一局所論の図式をもととする。

デリダの反復可能性、あるいは標記の同性は、このフィルタリングの作用から説明すると通りが良い。同性とは、コンテキストによって与えられた意味の同一性を越えて反復する標記の持続性なのであった。デリダはこの効果を実演するのに、とりわけ頭文字 [イニシャル] のモチーフを利用する。エドガー・アラン・ポー「盗まれた手紙」を読解したテキストで、デリダは大臣とデュパンの略署 (イニシャル) の一致に拘泥していた。「略署 [sigle]——それは大臣 [D……] とデュパン [Dupin] の双方にとって同じ D である——はファクシミリ [fac similé] だが、中身は本物である」³⁹——このイニシャルの (偶然の) 一致は、デュパンによる手紙の偽装とすり替えに関わっており——そしてこの D は、デリダ [Derrida] にとっても同じ D である。また別のテキストでデリダは、プラトンからディオニシオス二世 [Dionysius II] へ送られた書簡を、同じ「D」のイニシャルの元 (わざと誤って) 受け取る仕草を見せる⁴⁰。こうした D の転用 (反復) は、まさに記号列の一部 (名前の末尾) が検閲によって除去されることで可能になる。原子的単位としての語の分割

³⁶ Derrida, J., "Forcener le subjectile" in Antonin Artaud: dessins et portraits, Schirmer/Mosel Verlag, München, 1986. (『基底材を猛り狂わせる』松浦寿輝訳、みすず書房、1999年)、邦訳pp.30-31.

³⁷ [FSE], 邦訳p.431.

³⁸ 「語もまた「一次的」は物である […] 語は、それが夢のなかで一次過程という虚構の限界に向けて引き寄せられ誘惑される限りで、純然たる物に変化してしまう傾向があるということ認めねばならないのだ […] 純粋な語や純粋な物は、一次過程、ひいては二次過程という観念と同様に、「理論的虚構」なのである。「夢」という中間状態と「覚醒」という中間状態は、言語活動の本性からすると本質的に区別されることはない。「語は夢によってしばしば物として扱われる。このとき、語に対しては、事物表象と同じモニター・ジュがおこなわれる」 [FSE], 邦訳p.465. 引用部はFreud, S., "Die Traumdeutung" in Gesammelte Werke, Bd.2-3, Imago Publishing, London, 1942(1900). (S.フロイト「夢解釈」、『フロイト全集』第5巻、新宮一成訳、岩波書店、2011年)、邦訳p.26の箇所。

³⁹ Derrida, J., "Le Facteur de la vérité" in La carte postale: De Socrate à Freud et au-delà, Flammarion, Paris, 1980[FV]. (J.デリダ「真理の配達人」『絵葉書 ソクラテスからフロイトへ、そしてその彼方』I・II巻、若森栄樹・大西雅一郎訳、水声社、2007年、2022年)、邦訳II巻p.316.

⁴⁰ Dのイニシャルの使用はDerrida, J., "Envois", "Le Facteur de la vérité" in La carte postale: De Socrate à Freud et au-delà, Flammarion, Paris, 1980. (J.デリダ「送る言葉」『真理の配達人』『絵葉書 ソクラテスからフロイトへ、そしてその彼方』II巻、若森栄樹・大西雅一郎訳、水声社、2022年)、p.92, 94など。

この点については郷原佳以「デリダにおける《ミッションインポッシブル》：灰、自伝、エクリチュール」『Language, Information, Text = 言語・情報・テキスト：東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻紀要』、23号、2016年、pp.53も参照のこと。

不可能性は、デリダにおいて認められない。記号の同一性を経験的次元の外部に求めるメイヤスーに対し、デリダは文字の「反復」を、第一に物質的な（損なわれうる）転写として考えていた⁴¹。

以上から、メイヤスーとフロイト・デリダの立場の違いを次のようにまとめることができるだろう。前者の議論では、記号の同一性によって量的演算という操作が担保される。翻って後者においては、量的処理によるフィルタリング（選好）の効果として文字の同性が導かれる。

4. 暗号 [code] から暗号 [crypte] へ——アブラハム+トローク&デリダの暗号論

メイヤスーとデリダの差異の帰結は、彼らの暗号論を並べて読むことでより明確になる。デリダの暗号論「Fors」（1976）は、ニコラ・アブラハムとマリア・トロークによる「狼男」の精神分析に宛てられた序文として書かれている。ここで言う「狼男」とは1910年からの4年間フロイトの下で分析治療を受けた実在のロシア人神経症患者を指し、その通称は彼がフロイトに語った悪夢の内容に依る。デリダは狼男の語る悪夢を「暗号」として分析する二人の分析家の手つきに、語という単位の解体を見た。

「狼男」の夢は多岐に渡るが、ここではその名の由来となったものを取り上げよう。「狼男」はフロイトの下で、その「悪夢」をスケッチ（図9⁴²）として提示しつつ、そのあらましをドイツ語で次のように説明する。

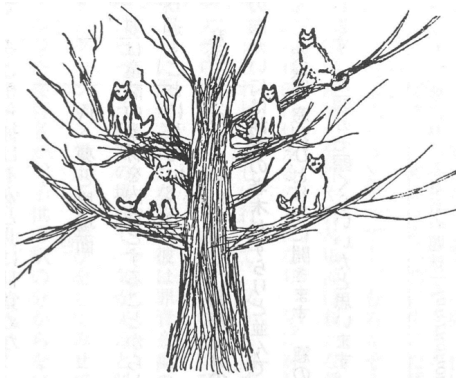


図9：フロイトの下を訪れた「狼男」による悪夢のスケッチ

狼の悪夢⁴³

私は、夜になって自分のベッドに寝ているという夢を見た。（私のベッドは足が窓に向かっておかれていた。窓の前には、一列の（一連の）古いくるみの木があった。私が夢を見たのは冬で、夜だったことは分かっている。）突然、窓が独りでに開いた！それで私は、窓の前にある大きなくるみの木の上に数匹の（一對の）白い狼が座っているのを、恐れおののいて見た。いたのは6匹か7匹の群れだった。狼は真っ白だった。それよりむしろ狐か牧草犬のようだった。というのも、狐のような大きな尻尾をもち、耳は聞き耳を立てている犬のようにぴんと立っていたからだ。明らかに狼に食われるのではないかという不安の下で、私は叫び声をあげた。

アブラハム+トロークは、この語りのなかに、彼の神経症の原因となった性的なトラウマへの言及が密かに埋め込まれているという大胆な仮説を立てる。焦点となるのは、彼が幼いころ二歳年上の姉から性的な誘惑を受けていたというエピソード⁴⁴である。この出来事に、彼らは「狼男」が直接語ることのなかった背景が隠されていると睨んだ。それ以前に起こった、彼の父親と娘（姉）とのあいだの性的関係である。彼はそれを、自分への行為が反復されたものであることを知っていた。

⁴¹ 「録音のもつ物質性、感覚性、反復的な面、紙片に書かれた文字、インクのデッサンなどは分割され、複数化されうるし、破壊されたり、行方知れずになることもある [...] オリジナルなき自身の迷宮[labyrinthe]、真正で分割不可能な文字=手紙なき複写[fac similé]の迷宮」[FV]、邦訳Ⅱ巻pp.288, 314。

⁴² Freud, S., "Aus der Geschichte einer infantilen Neurose" in *Gesammelte Werke*, Bd.12, Imago Publishing, London, 1947(1918)[GN]. (S.フロイト「ある幼児期神経症の病歴より（狼男）」須藤訓任訳『フロイト全集14』新宮一成・本間直樹編、新宮一成ほか訳、岩波書店、2010年）、邦訳p.55。

⁴³ [GN]、邦訳pp.25-26。訳はAbraham, N., Torok, M., *Cryptonymie: Le Verbier de l'Homme aux loups*, Flammarion, Paris, 1976[Cry]. (N.アブラハム・M.トローク『狼男の言語標本 埋葬語法の精神分析』港道隆ほか訳、法政大学出版局、2006年）、邦訳p.70による。

⁴⁴ [GN]、邦訳pp.15-16。

二人の分析者が再構成するストーリーでは、「狼男」の心的外傷を齎す破局は以下の四つの段階によって生じたとされる⁴⁵。1. 姉による弟（狼男）への性的な「誘惑」。2. それ以前に生じていた父親と娘の性的関係と、姉による弟へのその事実の暴露。3. 弟による、姉の告白の内容についての大人（家庭教師……）への検証。4. スキャンダルの露呈。この出来事のもの、彼の性格は癩癩的なものへと変容し、「悪夢」から狼恐怖症を生ずることとなる。彼らによれば、この「夢」は3から4に至る途中の過程を暗示している。

いかにして解読するか。彼らはこの夢を、フロイトのように（たとえば狼は父親への捕食不安を表している、等々）隠喩的な仕方では読まない。彼らは夢を文字通りに受け取ることで暗号の解読を試みる。二人が注目するのは、「狼男」の言語的来歴、つまり彼がロシア語を母語とするロシア人であり、そしてまさに幼少期のこの時期、イギリス人の家庭教師によって英語を習っていたという事実であった。彼はトリリンガルだった——だとすれば、この夢の解釈は**三つの言語に跨って**行われるべきなのではないか。

特に重要な最初の二文についての彼らの読解に触れてみよう⁴⁶。たとえば窓 [fenster]。窓を指すロシア語oknoはoko/otch [眼] に由来し（これは狼男自身が間接的に示唆する）、otchevidietz [実見証人] へと派生する。また他方英語のwindowはwinter [冬] とともに彼にとって関わり深い記念日Whit-Sunday [聖霊降臨祭] と映画『The White Syster』を綴りの上で連想させつつ先の類義語であるwitness [証言] へと滑り、otche-vidiet of the son [息子の実見証言] へと至る。「夢見る」はロシア語でvidiet son……vidietz-son [証人—息子]。寝ていることを表す英語lyingは、また嘘をついている状態を指差してもいる。一方で、寝るためのベッド、それは置かれていた=立っている [stand] ——横になっていない/嘘をついていない [not lying]。ロシア語の副詞notchiou [夜に] は音の相似からnot you [あなたではない] であるかのように響き、bett [ベッド] はbut [しかし] に聞こえる。さて、これら要素を登場する順番に従って並べると、以下のような対話が浮かび上がる。

母親：[証人はあなたではなく息子だ。彼は嘘をついている。]

家庭教師：[しかし彼は嘘をついていない。彼は真実を言う証人なのだ。]

同様に、くるみ [oriekh] は罪 [khriekh] へ、6匹 [chiest] は姉 [shiestra] へ、狼 [wolves] は父親のズボンの前開き [goulfik] へ。組み替えパズルのようにして、3から4に至る場面が復元される。息子は父親と娘の関係を証言する、嘘か真か？ 父親の愛を求めて姉の位置を羨望し、しかし姉の誘惑によって父親のペニス（性的欲望）と同一化した少年は、母親の否認によって告白/沈黙のダブル・バインドに立たされる。「暗号=埋葬室 [crypte] の〈自我〉は、自分が「真の証人」であると想像するが、その一方で、他方の〈自我〉は、証言が偽りであることを要求する」⁴⁷。彼自身の衝動によってふたたび証言すれば、彼は「嘘つき」になり、父親の立場は危うくなる……しかし黙っていれば真実を証言しないというまさにそのことによって嘘をつくことになり、また維持される姉の位置は彼にとって永劫届かないものとなるだろう。彼の暗号は、この秘密について「語ることも黙ることもできない」というジレンマを、語りつつ、語っているという事実そのものを秘匿することで回避するために生じていた。

しかしなぜ、このように込み入った方法で暗号化がなされたのだろうか。この機序を追うには、アブラハム+トロークの別の論文で立てられた、**取り込み [introjection]** と**体内化 [incorporation]** の区別⁴⁸を見なければならぬ。

取り込みは対象の欠如のことば（隠喩）による置き換えの過程であり、典型的には幼児の言語獲得の場面から説明される。母の乳（物—対象）で満たされていた口は、そうした対象を欠くようになると、その代理としての語—対象で満たされた口に置き換わる。たとえば、乳を求めて母の名を呼ぶようになる。この物を口にすることから語を口にすることへの移行が取り込みと呼ばれる。現前の隠喩化こそ取り込みの領分であり、したがって、その偽装でありつつも取り込みと区別される体内化は、反対に脱—隠喩化として表現さ

⁴⁵ [Cry], 邦訳p.47.

⁴⁶ [Cry], 邦訳pp.70-76, 82-83. この夢全体の「翻訳」はpp.70-84.

⁴⁷ [Cry], 邦訳p.162. 訳を一部改めた。

⁴⁸ Abraham, N., Torok, M., "Introjecter-Incorporer: Deuil ou mélancolie" in L'écorce et le noyau, Flammarion, Paris, 1987(1972). (N.アブラハム・M.トローク「喪あるいはメランコリー：取り込むこと—体内化すること」佐々木俊三訳『表皮と核』大西雅一郎・山崎冬太監訳、松籟社、2014年）、邦訳pp.288-294. デリダによる参照はDerrida, J., "Fors", in Abraham, N., Torok, M., Cryptonymie: Le Verbier de l'Homme aux loups, Flammarion, Paris, 1976[For]. (J.デリダ「Fors」N.アブラハム・M.トローク『狼男の言語標本—埋葬語法的精神分析』港道隆ほか訳、法政大学出版局、2006年）、邦訳p.223.

れる。対象の、その不在または喪失を言葉にする／カミング・アウトすることが禁じられている（「口が或る語をはっきりと発音したり、或る文を発したりできない」）場合にそれは起こる。このとき話す口はその性格を停止し、食べる口へと再び退行することで、語を物として咀嚼し始める。狼男の暗号は、まさしくこの体内化の結果である。ここから彼の暗号の持つふたつの特徴が説明できる。

1. デリダ曰く、語による記号的な置換を拒絶しながら行われる暗号化は、「一語を別の語で、一つの物を他の物で、一つの物を一つの語によって、一つの語を一つの物によって代理＝表象し—隠す [representer-cacher]」⁴⁹コード [code] の形態を取らない。これは暗号をとくにcodeの語で呼び表したメイヤスーとの隔絶をよく表すものだ。単語は単語であることを止め、多言語の隙間に浮遊する綴字あるいは「韻」として、複数の言語回路を跨ぐ並列的変換によって処理される。それは「複数の主体＝主題 [sujet]、複数の対象＝オブジェ、複数の入り口・出口をもつ一枚の絵の場面でしか翻訳されない暗号＝数 [chiffre] の断片」⁵⁰になるのだ。言語をまたぐ以上、記号の同一性は明らかに維持されない。このような暗号のあり方は、まさしく基号的な分散表象の形態と呼べるだろう。

2. 先の説明にしたがえば、取り込みが喪の完遂する過程であり、対象の喪失の受容へと方向付けられるのに対し、体内化は喪の拒否としてのメランコリー、対象の喪失の否認に帰される。ところで体内化において対象の不在が知られてはならないのなら、暗号の存在それ自体がまた秘匿されなければならない。「狼男」はそうと知られないように、**暗号化していないかのように暗号化する＝非—暗号化することで暗号化する**。暗号が発見され解かれた暁には、欲望の存在が、したがって欲望の対象の不在が暴かれるだろう。そのため暗号化の工程はつねに二重になる。暗号はまず対象の不在を否認し、ついで自身の存在を否認する。喪失すべきことは何もなく、「これは暗号ではない」。デリダがcrypte [地下埋葬室＝暗号] に認めた次の入れ子状の構造はこの点から把握される。

crypte [地下埋葬室＝暗号] とは何か？ crypteが立ち現われることはない [...] 配置は隠蔽するために設置されている。何ものかを、何らかの形で [死] 体を。しかしそれは、**隠蔽を隠蔽するためでもある**。何かを隠し持つのと同じだけ、自ら自己を隠匿するcrypteである⁵¹

体内化は自らを隠し、取り入れになりすます。つまり、暗号は暗号でないものと見分けがつかなくなることによって成功するのだ。暗号と非—暗号、の混同としての暗号。ここに「決定不可能な非解消」⁵²が存在する。奇妙なことに、記号についての態度の差異——ひとつめの特徴はこの懸隔を表している——にもかかわらず、デリダとメイヤスーの語る暗号は、この入れ子上の構造において非常に近接している。

5. 話者 [speaker] から聴者 [listener] へ——ジップの言語経済学

ある暗号めいた文字列に出会ったとき、それが真に秘密を内に隠した痕跡なのか、ただ意味深長なだけの無意味な羅列なのか判断することはとても難しい。このような混同を利用した文書秘匿術を、一般にステガノグラフィーと呼ぶ。メイヤスーとデリダは、「これは暗号である」と「これは暗号ではない」というふたつの視点の混同それ自体を再び「暗号」と名指す手つきにおいて共通していた。

ところで、これとまったく同型の構造が情報理論における基礎的な枠組みのなかに登場する。

1948年、クロード・シャノン⁵³とノーバート・ウィーナー⁵⁴はそれぞれ、「情報」という捉えどころのない概念を定量化するための指標を提案した。情報の量を、ともに事象の確率 p とその対数 $\log p$ の積の総和（積分）に比例するものとして説明した彼らの定義は、つぎの見解において共通していた——たまにしか起

⁴⁹ [For], 邦訳p.230.

⁵⁰ [For], 邦訳p.233.

⁵¹ [For], 邦訳p.178.

⁵² [For], 邦訳p.193.

⁵³ Shannon, C. E., "A Mathematical Theory of Communication", The Bell System Technical Journal, Vol. 27, pp.379-423 (July 1948); pp. 623-656 (October 1948), 1948. (C.E.シャノン+W.ウィーナー『通信の数学的理論』, 植松友彦訳, 筑摩書房, 2009年, pp.61-211.)

⁵⁴ Wiener, N., Cybernetics: Or Control and Communication in the Animal and the Machine, The Technology Press; John Wiley & Sons, Inc., Hermann et Cie, 1948. (N.ウィーナー『サイバネティクス 動物と機械における制御と通信』池原止夫夫ほか訳, 岩波書店, 2011年)

こらない（低確率の）出来事は、いつも起こる（高確率の）出来事よりも多くの情報を持つ。しかし彼らのあいだには決定的な差異が存在してもいた。シャノンにとって情報量はエントロピーの増大と結びついていたが、ウィーナーの場合はその逆であった。彼らはこの尺度にそれぞれ反転した符号 [+ , -] を与えていたのだ⁵⁵。

「情報」をもっぱら工学的概念として扱うために意味論の含意を排除しようとしたシャノンの留保にもかかわらず、両者のあいだの隔たりはある意味論的なカテゴリを導入しなければ説明できない。エントロピーを解釈されるべき複雑なシグナル（メッセージ）としてみなしたシャノンと、意味のない乱雑なノイズとしてみなしたウィーナーの視点の差異は、これからみるジップにおける聴き手と話し手の位置に対応している。同じ情報がシグナルとしてみなされるかノイズとしてみなされるかは、われわれの視点に委ねられている。ここで焦点になっているのは、いかに信号と雑音を峻別するかという技術的な問い以前に、いかに話し手と聴き手が「信号」と「雑音」という概念を峻別するか（あるいは、そもそも峻別しうるのか）という意味の問いである。ジップは自然言語の持つ確率的特性を、まさしくこのシャノン／ウィーナーの視線に対応する、コミュニケーションのふたつの相反する解釈コストの均衡によって説明しようとした。

*

とあるラビの解釈によれば、よく知られるシナイ山の十戒の神託において、モーセがじっさいに受け取ったのはそのはじめの一語、「我 [אֶלֶף]」のイニシャルである \aleph [アレフ] ただ一音のみであったという⁵⁶。それ自体としては具体的な内容を持たない、極度に圧縮されたたったひとつの音を、ヘブライの人々が理解できる仕方でも——たとえば「主の名をみだりに唱えてはならない」というような豊かな意味を持つ命令文として——翻訳してみせたことこそ、モーセの聖書上の特異な権能にほかならない。カバラ思想家ゲルシヨム・ショーレムはそう結論している。

カバラにおける \aleph のモチーフに惹かれ、同名の掌編⁵⁷まで書き上げたホルヘ・ルイス・ボルヘスは、他方言語についての対照的な（しかし表裏である）イメージを「バベルの図書館」(1941)⁵⁸として著している。圧縮ではなく展開の極限を描いたこの作品の舞台は、あらゆる可能な文字列があまねく本として保存された無限の図書館だった。すべてを収め、記述される数多の意味を網羅する図書館のなかで最終的な真理を発見しようとする司書たちの試みは、だがみな徒労に帰すことになる。空間があまりに茫漠であり、ほとんどの本も乱雑なワード・サラダやレター・サラダで埋め尽くされているからだ。

思弁的ともいえるこのような言葉の両極端を、われわれが日常的に用いている自然言語の性質を記述するための枠組のレベルで利用したのがジップ「語の経済性」(1949)である。彼は語の偏った出現——英語においてyouやtheは非常によく現れるが、たとえばotorhinolaryngology [耳鼻咽喉頭科学] は相当稀にしか登場しない——の頻度分布の形状を、コミュニケーションにおいて話し手と聴き手がともにコストを最小化しようとする、相反するふたつの傾向の均衡として説明しようとした⁵⁹。

話し手／聴き手のエコノミー。まず前者が志向するのは、意味の集合に対して使用される語彙の数の最小化である。最小努力の原理 [the Principle of Least Effort] に従う彼らは、できるだけ少ない語彙でより多くの意味を伝えようとする。その究極的な理念はたったひとつの語がすべての意味を担う完全な多義語の想定であり、これはまさしく \aleph によって担われる神託のミニマリズムそのものだ。語り手の辞書はただひとつの語からなり、いかなる語彙の選択も必要ではない。したがってこのとき、発話の持つエントロピーはシャノンの定義に沿って零と一致する。

しかしもちろん、これは聴き手の経済性と真っ向から対立する。ある語の抱える多義性が多ければ多いほど、解読者は意味の選択集合のなかから正しい意味を特定するためにより多くのコストを支払わなければ

⁵⁵ この点はよく知られた事実である。先行する論者による紹介はHui, Y., *Recursivity and Contingency*, Rowman & Littlefield Publishing, 2019. (Y. ホイ『再帰性と偶然性』原島大輔訳, 青土社, 2022年), 邦訳pp.176-177, また中井悠『失われた情報——時間、フレーム、パフォーマンス、実験的行為 (1948-92)』『表象』第4号, 表象文化論学会, 月曜社, 2010年, pp.102-103など。

⁵⁶ Schollem, G., *Zur Kabbala und ihrer Symbolik*, Rhein Verlag, 1960. (G. ショーレム『カバラとその象徴的表現』小岸昭ほか訳, 法政大学出版局, 1985年), 邦訳pp.42-43. 直後のショーレムの見解はpp.43-44.

⁵⁷ Borges, J. L., "El Aleph" in *El Aleph*, Losada, 1949. (J. L. ボルヘス「アレフ」『アレフ』鼓直訳, 岩波文庫, 2017年, pp.195-221.)

⁵⁸ Borges, J. L., "La biblioteca de Babel" in *El jardín de senderos que se bifurcan en Ficciones*, Emecé Editores, 1944(1941). (J. L. ボルヘス「バベルの図書館」『八岐の園』『伝奇集』鼓直訳, 岩波文庫, 1993年, pp.103-117.)

⁵⁹ Zipf, G. K., "On the Economy of Words" in *Human Behavior and the Principle of Least Effort: An Introduction to Human Ecology*, pp.9-55., Addison-Wesley Press, 1949[EW], とくにpp.20-31の箇所。

ならないからだ。ほとんど沈黙に等しいひとつの響きから神託を正しく復元するような曲芸は、モーセのような人物でなければとうてい実現不可能だろう。

かくして受信者が発信者に対して要請するのは、異なる意味のそれぞれに一対一対応する語の存在ということになる。意味はすくなくともその発話を構成する単語の数だけ想定されうるのだから、この志向の極限は、畢竟ありうべき意味に厳密に対応するすべて相異なる語（文字列）の均等な出現に至る。このとき、発話の持つエントロピーは最大値を取る。言うまでもなく、このように限りなく非効率な発話は発信者に無限に分厚い辞書（語彙）を要請し、まったく現実的ではない。バベルの図書館がBabel [混乱] の名で呼ばれる所以である。

ジップの主張は、われわれのじっさいの発話は、このふたつの力学——**統一化 [Unification]** と **多様化 [Diversification]** の作用——のバランスによって説明されうる、というものだ。260430の語の連なりからなるジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』(1922)には、29899個の異なる単語が含まれている。この数は1より大きく、260430より小さい。ジップはそこに登場する単語の出現順位 r が、その出現頻度 F とおおむね反比例の関係を取り結んでいることを突き止めた。ひとつの語の際限のない繰り返すと、すべての語の一度きりの使い捨てのあいだで、語の使用の偏りがグラデーションをなしている。われわれの言語に広く共通するこの双曲線型の分布（図10⁶⁰）は、今日ではジップの法則としてよく知られる傾向である。

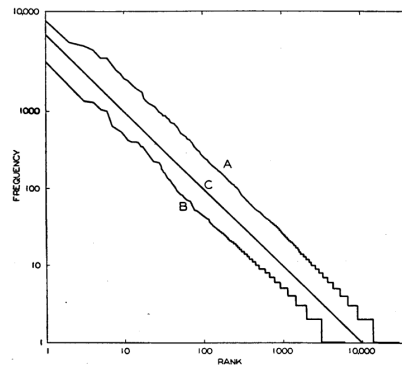


Fig. 2-1. The rank-frequency distribution of words. (A) The James Joyce data; (B) the Eldridge data; (C) ideal curve with slope of negative unity.

図10：語の出現順位と出現頻度の関係を示す両対数グラフ。Cが理論値、Aが『ジェイムズ・ジョイス』を標本とする実測値。

そして語が意味に対応するならば、意味の分布に同様の規則性があると想定するのも不自然ではない。発話においてある頻出する語の出現頻度を F_1 として、この語の有する m_1 個の意味それぞれの平均出現頻度を f_1 とおくと、 $m_1 f_1 = F_1$ が成り立つ⁶¹。さて先の説明によれば、統一化の作用は m_1 を最大化しようとし、多様化の作用は m_1 を最小化（したがって f_1 を最大化）しようとするのだった。ここで $m_1 = f_1$ となると両者がちょうど均衡すると仮定しよう。このとき成立する $m_1 = \sqrt{F_1}$ は、ある語の有する多義性（区別される意味の数）がその出現頻度の平方根に等しいことを示唆する。実際Zipfは、英単語の出現頻度表において、この等式が経験的な水準でおおむね妥当されることを確認している。

したがってつぎのように言える。1. 自然言語の空間は、少数の頻出する多義語と、それより多くの、稀にしか現れない限定的意味を持つ単語に分節されている。2. われわれの言語使用の持つこの偏りは、衝突するふたつの経済性のあいだで生じた最適化の結果である。

ジップの経験的仮説はのちに情報理論の枠組のなかで再解釈され、話者/聴者それぞれにおける（条件付き）エントロピーの等号条件を見ることでより厳密な数理的証明が行われることとなった⁶²。そもそも情報理論の当初の目的からしてコミュニケーションにおける**信号 [signal]** と **雑音 [noise, bruit]** の効率的な識別にあったのだから、この対応はまったく妥当な成り行きである。

ジップの慧眼は、経験的な水準における現象を説明するのに超越論的なふたつの臨界を導入する方法論にあった。これから見るセールスの理論は、ジップによる着想の、存在—意味論的なパラフレーズとして

⁶⁰ [EW], p.25.

⁶¹ 数え上げ可能であり同時に生じることのない「意味」の単位という少なからず論争的な単純化についてはいったん棚上げすることにしよう。

⁶² Corominas-Murtra, B., Fortuny, J., & Solé, R. V., Emergence of Zipf's law in the evolution of communication. Physical Review E, 83(3), American Physical Society, 2011を参照せよ。

読むことができる。彼はジップのそれと同等の二極を導入したうえで、両者のあいにおける意味の発生を主張する。

6. 雑音 [bruit] から意味 [signal] へ——セールの文字学

セールの関心とわれわれのこれまでの議論を重ねるためには、まず『コミュニケーション』(1968)のある箇所⁶³を見るとよい。彼はここで書記的なコミュニケーションの前提である記号 [symbole] の成立条件を問うている。受信者が記号の意味を解く鍵を持っていること、つまり発信者と受信者が同じコードを共有すること、これは当然である。だが実際にはむしろ次の点がしばしば問題になる。発信者ができるだけ上手に記号を書くこと、これである。セールは記号の文字としての性質に注目する。書かれた文字には、微細な線の揺らぎ、手の震え、書き損じが混入する。こうした差異を差異のままにしていれば、正しいコミュニケーションは不可能になるだろう。だから記号の同一性を要求する者——彼がこれを数学者の範例で表すことは興味深い——は、誤記を形態から排除するために、記号の再演を同一の形態として再認するための抽象的なクラスを導入しなければならない。彼らの努力は、信号/雑音の峻別の滞りない成功に賭けられている。言うまでもなくメイヤスの先の論文におけるケノタイプとは、このクラスのことである。

数学的な形態は即時的な「普遍」であると同時に、われわれにとっての「普遍」でもある。したがって対話におけるコミュニケーションを成功させようとする最初の努力は、ある形態をその経験的表現から独立させようとする努力と同型なのである⁶⁴

前述のとおり、メイヤスは偶然を確率的なものとして把握していなかった。メイヤスが偶然性なるものを非一確率的なものとして位置付けなくてはならなかった動機がここから見えてくる。彼にとって世界は数理的な構造と緊密に対応する。彼の語る偶然性はこの構造から導かれるのだが、この数学的構造が成立するためにはまず記号の同一性が理念的な水準で担保されていなくてはならず、経験的な標記の持つ可感的な差異は、再演から反復へ至る移行過程において抹消されなければならない。そしてこの処理においては、記号に混入するノイズの、したがって経験的な水準における偶然性の排除が求められるというわけだ。偶然性は超越論化されなければならない。そもそも世界と主体のあいだの不完全なコミュニケーションを前提とする相関主義への批判に動機づけた彼の立場からすれば、この方針は一貫したものといえるだろう。

だがセールによれば、「哲学者は科学者がいら立つところで立ち止る」⁶⁵。どういうことか。この点を詳らかにするには、彼がルクレティウスに依拠しながら展開する独自の存在論を見る必要がある。

まず次のふたつの前提を挙げておこう。1.セールが土台とするルクレティウスの原子論において、物質を構成する原子は文字と同一視されている。物質を形成する物理的な規則は、文字の配列規則、すなわち文法とのアナロジーの下に置かれている。2.彼の原子論における中心概念であるところの**偏倚 [clinamen]**は、尋常には垂直方向に等しく自由落下する原子たちに対し不規則に（理由なく）与えられる力のベクトルとして説明される。この偶発的な効果によって初めて原子の衝突が生じ、物質が形成される契機となる⁶⁶。

セールのうちにジップと類比的なダブル・バインドが立ち現れるのは、この偏倚の程度をめぐる場面だ。彼は意味がまったく不在になってしまうようなふたつの状況をルクレティウスの世界観のうちに読み取る⁶⁷。一方は瀑布、原子がなべて平行に一方へと進行する、偏倚と差異の欠如した空間であり、一方は雲、あらゆる原子が過剰な偏倚によってまったくでたらめな方向へ運動する、差異の飽和する空間である。同一性の全面化、あるいは多様性の全面化である各々の状態はそれぞれエントロピーの無限大と零に対応づけられるが、いずれにせよそこに意味なるものはまったく含まれていない。どちらのケースでも、大域的なひとつの傾向（一方向的な秩序、あるいは完全なランダムネス）のなかで個々の運動の特殊性が抹消されて

⁶³ Serres, M., La Communication. Hermès I, Éditions de Minuit, Paris, 1968[H I]. (ミッシェル・セール『コミュニケーション ヘルメス I』豊田彰・青木研二訳, 法政大学出版局, 1985年), 邦訳pp.32-39.

⁶⁴ [H I], 邦訳p.38.

⁶⁵ [H I], 邦訳p.36.

⁶⁶ Serres, M., La naissance de la physique dans le texte de Lucrèce : fleuves et turbulences. Éditions de Minuit, Paris, 1977. [NPL] (ミッシェル・セール『ルクレティウスのテキストにおける物理学の誕生 河川と乱流』豊田彰訳, 法政大学出版局, 1996年), 邦訳p.208-210. 1に対応するルクレティウスの記述はルクレティウス『事物の本性的について 宇宙論』藤沢令夫ほか訳, 筑摩書房, 2025年[DRN], 邦訳pp.61, 67, 124-126, 144-145 (それぞれ第1巻814-829行, 908-914行, 第2巻688-719行, 1007-1022行) など. 2に対応する箇所は邦訳pp.94-99 (第2巻216-293行) を見よ.

⁶⁷ [NPL], 邦訳p.222, 225-226.

しまっている。情報をエントロピー／ネグエントロピーのいずれとして捉えるにせよ、これら臨界において、両者の視点の差異は情報の概念それ自体とともに消失している。

セールは、雑音の群れのなかから信号が、したがって意味が生じるのは、両者の中間状態においてであると考えた。それは全面化に対する微細な局所性として現れる。肝要なのは偏倚がまったく起こらないのではなく、絶え間なく生じ続けるのでもなく、稀であることだ。ここから「意味はありそうにないものである」という定義⁶⁸が妥当される。彼の語る偶然は、全面化する偶然（と必然）の手前で、この二項対立そのものを相対化する点において二階の「偶然」としての役割を担う。

このような秩序とランダムネスの緊張において、原子が文字に準えられたいまひとつの意義が明らかになる。セールによれば、数字ではなく文字であるというのが重要なのだ。任意の数字の並びはなんであれ数として成立するが、文字の並びがみな文として許容されるわけではない⁶⁹。文字は配列の規則を持ち、そうであるがゆえに意味を帯びる。可能な文の集合は可能な文字列の集合より小さく、ある実現した文の集合はさらにそれよりも小さい。偏りが生じるのは、この種の有限性のためである。ある言語における単語ごとの出現頻度の偏差を導く努力の最小化は、この有限性への志向にほかならない。すなわち、意味とは希少性である⁷⁰。（余談だが、これはLLMの台頭によって言葉が無尽蔵に増殖し、言説空間がほとんどバベル的に飽和したわれわれの時代にあつて非常に示唆的なテーゼだろう。いくらLLMが万能の言語能力を身につけずべてを記述できるようになったとしても、けっきょく意味は有限性から生じる偏りにしか宿らないのだ。）

さて、意味を希少性 [rareté] と結びつける観点において、シグナルとノイズを画定する境界線はつねに揺らいでいる。なにが稀であるかはつねに出来事に対し外在的な視点からしか決定されえないからだ。サイコロで一の目しか出ないという現象は、イカサマがないと信じている視点からすればきわめて稀に映るだろうし、イカサマがあると信じている視点からすればむしろまぐれが失われているように見えるだろう。セールはまた別のテキストで、両極のあわいで生じる意味の微細なダイナミズム⁷¹をエントロピー／ネグエントロピーの対を明示的に用いながら論じている。以下の記述は、先に見たシャノン／ウィナーの視点が鏡像的關係にあることの簡潔な要約となっている。

系の内部にある観点からすれば、あるチャンネルを通じて行われる一要素から他の要素への情報の伝達は、散布度の引き算を行うのである。それは雑音であり、メッセージの障害であるからだ。系の外部にいる観測者にとっては、散布度は正の量として勘定されるべきものである。というのは、それは系の複雑さを増大させるからである⁷²

記述は単なる見解の整理にとどまらない。セールはさらにこの符号反転を可能な操作として位置付けなおすことで、それぞれの枠組を逸脱して両者を調停するメタ・モデルを提供する。彼は符号の反転を、それまでノイズだと見なされていたものを、新たにシグナルとして認識し直す更新の手続きとして考えた。その更新を司る動的装置の範例となるのが、生命をはじめとする有機体である。有機体はたえず外部を取り込む内部であつて、その機能は、ノイズをしだいにシグナルへと整流・濾過する局所的なチャンネルの連結として

⁶⁸ [NPL], 邦訳p.226.

⁶⁹ [NPL], 邦訳p.220. ルクレティウスによる元の記述はたとえば次の箇所。「すべての元素があらゆる仕方で結合できると考えてはならない [...] それには明らかに一定の規則がなければならない [...] 同一の原則がすべてのものを規定しているのである」[DRN], 邦訳pp.124-125. (第2巻700-719行)

⁷⁰ フーコー『知の考古学』(1969)は、まさしくこのような意味で希少性 [rareté] の概念を捉えている。彼もまたこの時期情報理論に傾倒していたことが知られる人物であり、この対応に不思議はない。かつて『バベルの図書館』をもとに言語の無限性を論じていた (Foucault, M., "Le langage à l'infini" in *Tel quel*, n°15, Éditions du Seuil, 1963, pp.44-53. (M.フーコー「言語の無限回復」野崎敬訳『フーコー・コレクション2 文学・侵犯』小林康夫ほか編, 筑摩書房, 2006年), 邦訳pp.93-113を参照せよ) 人物は、しかしここでは超越論的な向きから距離を取る。「言説はもはや、決して予見しえぬ新たな富をそこから常に引き出しうるような、組み尽くしえぬ財宝ではない。言説はまた、常に前もって語り終えており耳を傾ける術を知る者に対して回顧的な神託を授ける摂理でもない」(Foucault, M., *L'archéologie du savoir*, Gallimard, 1969. (M.フーコー著『知の考古学』慎改康之訳, 河出書房新社, 2012年), 邦訳p.229)。彼の関心はもはや可能な(無数の)文字列の集合ではなく、実現した(数少ない)文の集合にあった。言表分析は、「すべてが語られることはない」と要約される希少性のテーゼを基礎としなければならない。「分析が明らかにしようとするのは、どのような原理に従って、実際に言表された有意味の集合のみが出現可能となったのかということなのである [...] 自然言語において言表されえたかもしれないことに対し、言語学的諸要素の無制限な組み合わせに対して、言表は(それがいかに多数であるとしても)常に不足している [...] したがって、希少性の原理が、あるいは少なくとも、言語体系によって開かれる可能な言述の領野が満たされることはないという原理が探求されることになるだろう [...] 問題は、限定された現前のシステムを明らかにすることである」(pp.225-226)。かくして、言表は稀少であるからこそ意味を持つ。

⁷¹ このような中間状態の実装を、一般的なLLMにおいて導入される温度 [temperature] パラメータに見出すことが出来るだろう。この値は統計的予測に基づく通常のトークン選択に付加されるランダムネスの強度を設定するもので、低くすると秩序だつてはいるが変化に乏しい文が、高くすると創造的だがカオティックに破壊した文が出力される。われわれにとってちょうどいい塩梅のコミュニケーションが成立するのは、温度を中間的な数値に設定した場合であることが経験的に知られている。温度という名付けにおいて、セールと類比的な原子の運動のメタファーが持ち出される点は興味深い。

⁷² Serres, M., *La Distribution*. Hermès IV, Éditions de Minuit, Paris, 1977. [HIV] (ミッシェル・セール『分布 ヘルメスIV』豊田彰訳, 法政大学出版局, 1990年), 邦訳p.368.

説明される⁷³。セールは感覚量が刺激の対数に比例するとしたウェーバー—フェヒナー則 $[S=k \log P]$ と情報量を表す式の相同性を指摘しつつ⁷⁴、われわれの高次の知覚における快や苦痛の感覚をこの情報処理のセリーの末端へと配置する。

この装置 [内部感覚] は、われわれが快感と苦痛という二つの大きなカテゴリーに統合する諸記号を知覚する [...] 一連の逐次的な統合によって代わる代わる濾過される一般的な聴取行為の最終段階 [...] 知覚される最終的な対は、情報—雑音というもとの物理的な対の最終的な翻訳、最終的な整流なのだろう [...] 偶然の束が、有機体というこの精妙な変換器によって、レベルごとに濾過され、浜辺の磯波の成れの果てとして、エロスや死の形象をとって、われわれの足もとにぶつかって来るのである⁷⁵

快を情報の圧縮と結びつける理路は、快／不快の区別を外部から到来する過剰な外部刺激の量を圧縮して節約する拘束 [bindung] の力能によるものとしたフロイト『快感原則の彼岸』(1920)⁷⁶における経済論的発想を引き継ぐものだ。またこれは本稿のはじめに見た学習による要約のプロセスとも相同である。この連関を踏まえれば、セールの文字学もまた、接続主義的なパラダイムのなかにいる。以上の文脈に照らし合わせれば、セールの存在論／有機体論を、情報理論から一度取り除かれた意味認知の領域を再びその袂に回帰させるものであると同時に、この工学的な枠組を精神分析へと接続するための銚として位置付けることができる。

7. 結：接続主義 [connectionism] から文字学 [grammatology] へ

セールによって図られた情報理論の拡張は、元の文脈を離れ、またさらなる展開へと接続しうるポテンシャルを持っている。その一例を論じてみよう。たとえばジップが単語の意味認知において論じた経済性を、セールが取り上げたような文字の視覚認知の水準において論じることにはできるだろうか。じつはすでに研究がある。認知科学者マーク・チャンギー(2006)の研究⁷⁷は、われわれの用いる種々の記号体系において文字を形成する単純なトポロジカルなパターン [文字素] の出現頻度が普遍分布 [universal distribution] を成すことを明らかにした。ピアーズ・ケリーら(2021)によれば、かような文字形状の収束の過程において、ジップが語に適用したそれと同等のダブル・バインドが生じている⁷⁸。すなわち、認知コストを下げるためには、文字はその識別性を損なわない程度に単純化されなければならない。

こうした観点においては、単語だけでなく文字もまた、分節化された稀少性としての意味を帯びることになるだろう。ここでいう意味とは記号主義者が前提においたような表象的意味には満たないものであるだろうし、確率の次元を無視してしまうメイヤスの言うケノタイプ以上のものでもある。それはちょうど、分散表象の一部をなす。

先に見たとおり、ルクレティウスの原子論を引きながらも、セールは記号の単一性に拘泥していなかった(彼はいわば、文字そのものを構成する原子としての“文字”について考えていた)。これはルクレティウスの偏倚の発想に導かれつつ、記号の分割不可能性テーゼを導きかねない原子論から距離を取ろうとしたデリダ⁷⁹と立場として近接する。そして両者はともにフロイトの経済論の文脈を引き受けつつ文字なるものを

⁷³ [HIV], 邦訳p.367.

⁷⁴ 「フェヒナー・ウェーバーの名で呼ばれる法則は $S=k \log P$ と書くことができ、感覚は刺激の対数に比例して増大するという事実を表す。現代的な意味での「情報」の定義は $I=k \log P$ と書くことができ、情報は同等に確からしい状態の数の対数に比例して増大するという事実を表す。表式上の類似性を手がかりにして、問題になっている現象の類似性を考えることができるだろうか [...] 周知のように、(情報理論)は、ある実験科学が指定された条件のもとで越えることのできない精度を、計算することさえできるのである。それを越えてある観測を行おうとすれば、支払うべきネグントロピーの代価は無限大にまで増大していくであろう。ここで仮定した類似性のおかげで、新しい感覚の出現関の(計算可能な)存在理由を手に入れることができるようになるであろう。この関を低くするために、つまり区間を細くするために有機体が支払うべきネグントロピーの代価は、感覚器官の機能性、さらには有機体の全体的均衡と両立しなくなるだろうからである。Serres, M., L'Interférence. Hermès II, Éditions de Minuit, 1972. (ミッシェル・セール『干渉 ヘルメスII』豊田彰訳, 法政大学出版局, 1987年), 邦訳pp.191-194.

⁷⁵ [HIV], 邦訳p.366, 370.

⁷⁶ Freud, S., "Jenseits des Lustprinzips" in Gesammelte Werke, Bd.13, Imago Publishing, 1940(1920). (S.フロイト『快感原則の彼岸』『自我論集』竹田青嗣編, 中山元訳, 筑摩書房, 1996年), 邦訳pp.150-157. セールによるフロイト経済論への言及は[HIV], 邦訳p.357など。

⁷⁷ Changizi, M. A., Qiong, Z., Hao, Y., & Shinsuke, S., "The Structures of Letters and Symbols throughout Human History Are Selected to Match Those Found in Objects in Natural Scenes" The American Naturalist 167(5), 2006. E117-E139.

⁷⁸ Kelly, P., Winters, J., Miton, H., & Morin, O., The Predictable Evolution of Letter Shapes: An Emergent Script of West Africa Recapitulates Historical Change in Writing Systems, Current Anthropology, 62(6), 2021, p.669-691. とくにpp.671-672の箇所。

⁷⁹ [MC]を参照のこと。

洞察していた。ジップからチャンギーへの移行、単語から文字（あるいは文字素）へのパラフレーズは、LLMの跋扈する今日に住むわれわれにおいて決して単なるスケールの置換ではない。それは記号的なパラダイムから、基号的なパラダイムへの下降である。

「記号論とは何よりもまずトポロジーなのだ、空間とは、ベクトルの、つまり方向を指示する矢印の場なのである」⁸⁰。ルクレティウス流の記述を踏まえて、最後にこう問うこともできる。フロイトとデリダが記憶の成立条件をニューロン間の通道 [シナプス] の接続強度の偏りとして思い描いていたこと、その実装としてのスモレンスキーの接続主義が、記号をベクトル量に変換する発想によって導かれていたこと、これらは偶然の一致だろうか。基号とはたんなる人間の言語認知の模倣のための小道具といった目的論的な次元を超えて、われわれの言語なるものへの認識を更新しつつある、ひとつの操作概念 [operative concept] なのだ。

⁸⁰ [NPL], 邦訳p.223. 傍点は筆者による。